

武部勤のアジアの未来図



武部 勤氏 略歴

前衆議院議員(8期)。農林水産大臣(第33代)、自由民主党幹事長(第39代)、衆議院議院運営委員長(第63代)を歴任。

議員時代にベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長、モンゴル友好促進議連会長、パレーン友好議連会長を務めたほか、今年3月1日には社団法人日本ベトナム経済フォーラムの名誉会長に就任するなどアジアを中心とする諸国との友好に尽力。このほど一般財団法人「東亜総研」を設立し代表理事に就任。

チーム力で培うアジアとの絆

11月21日から25日までインドネシアとマレーシアを訪問してきた。ジャカルタで開催された東急グループの会合に東急総合研究所の顧問として出席した。また日本インドネシア友好議連時代(※編集部注：幹事長、会長を歴任)からお付き合いのある次期インドネシア駐日大使やギナンジャール大統領諮問委員会委員ら要人と会談・情報交換を行うなど、得るものがある大きな“出張”となった。マレーシアでは「タンスリ小西」の名で知られる小西史彦氏にお会いすることができた。

私はこれまで、インドネシアとの関係強化についても、ベトナムとの関係に負けず劣らず力を注いできた。一年生議員時代、故渡辺美智雄先生から「日本の将来はアジアの発展にかかっている。なかでもベトナムとインドネシアとの関係はおろそかにすべきでない」と薫陶を受けたと同時に私の信念ともなったからである。

「ひとつのチーム東急でアジア展開を」

今回の東急グループの会合は、東急電鉄をはじめとする東急グループの各海外法人の社長らが一堂に会するもの。日本からも越村敏昭会長をはじめ東急グループの経営トップが参加し、出席者は総勢70人ほどの大会議となった。

東急グループ各社は、ご存知の通り、アジアだけ取ってみても様々な国々に進出している。今回の開催場所のインドネシアでは、東急不動産が「ハトモハジ・ダン・カワン」社を通じて住宅開発を30年以上にわたって展開しているほか、東急電鉄はベトナムに「ベカメックス東急」、東急建設はインドネシアに「東急コンストラクションインドネシア」、タイに「チョウカンチャン東急(タイ)」を展開している。

東急は現在、「ひとつの東急」をスローガンとして掲げている。東急グループと言っても別会社の集団であり、アジアにおいても当然のことながらそれぞれの親会社の事業方

針に沿って設立、運営されている。しかし、それでは大きな飛躍は望めない。「ひとつの東急」という大方針のもと、東急グループ全体の利益を考えた事業展開をすべき、という趣旨である。

これは、決して「東急グループだけで固まれ」という

排他的なものではない。現地従業員も含め、あらゆる関係する人達の利益と幸福を目指そうとするものである。

私はこれこそが日本企業の良さであり、これからの強力な武器となると考えている。

昔、ベトナムで「欧州企業との事業では、危険な仕事はすべて我々だけでやらされる。しかし日本企業は、危険で難しい仕事だからこそ一緒にやってくれる」「だから我々も技術を習得できるし、日本企業と一緒に仕事がやり



ジャカルタでは鹿取克章 駐インドネシア大使とも面談した

たいと感じるのだ」と言っていたことがある。これこそ日本人が尊ぶ「和の精神」だと感動したものだ。

この「和の精神」および「チーム東急」は決して、お人好しになれ、ということではない。日本企業の活動によって東南アジア諸国で培った信頼感が好日感情を醸成し、そうした国々との外交ひいては日本企業のアジア事業に有利に働いている現状を考えれば理解していただけるだろう。

アジア事業でもっとも大切で困難な

ことは合弁相手企業の選択であると言われる。「共に成長・発展したい」と考えてくれる相手でなければ事業は成功しない。

東亜総研では9月に設立したばかりの「在日ベトナム経営者協会」に協力することとなった。ディン・ゴック・ハイ会長(アジア・ニューパワー社長)の訪問を受けたことがきっかけ。同協会は日越のビジネス交流の促進を目的に設立。ベトナム航空、FPTジャパンなど32社が参加しており、今後も増えていくだろう。

東亜総研は日本企業のアジア事業にとっての「プラットフォーム」「架け橋」となるべく事業を展開しており、合弁相手の選定・紹介も行っている。同協会への協力もその一助となる筈だ。

次期駐日大使は 懐かしいユスロン氏

インドネシアでは懐かしい人達ととの再開があった。ひどりは年内の着任が予定されている次期駐日大使のユスロン・イザ・マヘンドラ氏。

彼が現地紙の日本特派員として来ていた時からの付き合いで、初めてお会いしたのは山崎拓先生(日本インドネシア友好議連会長、当時)の事務所だったと記憶している。

12年間に渡り日本に滞在した経験のある大変親日的で日本語に堪能な方である。ユスロン氏が大使として来てくれるというので私も非常に心強く感じている。

そのほか会談したシャリフディン・ハサン協同組合・中小企業担当国務大臣、ラフマッド・ゴベル・インドネシア日本友好協会理事長、オロワン・ブルサダ大学学長も素晴らしい人たちであった。

ギナンジャール氏に聞く 大統領選 小泉元首相の話をふたりで

ギナンジャール・カルタサスミタ大統領諮問委員会委員ともお会いした。私は国会議員になってすぐ、渡辺先生

ご夫妻にオーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、ブルネイ、ミャンマー(当時ビルマ)の5カ国に夫婦で招待していただいた。

そのとき私たちを自宅に招待し、その庭でインドネシア料理を振る舞ってくださったのが当時、投資庁長官だったギナンジャール氏。以来27年にわたる長いお付き合いとなったのだが、自民党幹事長を辞してからは機会がなくなっただけに、今回お会いすることができてうれしかった。

ギナンジャール氏には、2014年に行われるインドネシアの選挙にまつわる話をお聞きした。2014年4月に議会選挙、同7月に大統領選挙があるのだが、非常に混迷した状態が続いている。

庶民派として若者に人気の高いジャカルタ特別州知事のジョコ・ウィドド氏の気質。ゴルカル党のアプリザル・バクリ党首が抱える問題などここでは書けない話も聞いた。

状況はひとことでは「混沌としている」と言わざるを得ず、そうなれば人気集めのために、最低賃金の大幅上昇など日本企業にとっては辛い環境となるかもしれない。

ただ明るい話も聞いた。メガワティ

元大統領のお子様、ギナンジャール氏のご子息ら40代の若手政治家等に期待が集まっているようだ。

次世代を担う若手政治家が育っているのは頼もしい限りだ。

ギナンジャール氏が言う。「だが経験が少ないのが懸念材料ではある」。「経験は知恵を生む。その経験と知恵なら我々も負けてはいない」と合意した。

最近、何かと話題となっている小泉元首相の発言であるが、あれこそが長老の役割だと私は思っている。

政治はどうしても現実をスタート地点として、そこからの一歩前進という姿勢になりがちである。民主政治ならなおさらだ。

しかしそれでは大きな飛躍はなしえない。我々のような引退した政治家はその経験を元にして「理想を到達地点として、そこから一歩振り返る」知恵を持っている。

こうした役割は、私たちのような政治家に限らない。企業やいろいろな分野においても言えるのではないだろうか。現役世代の実行力と一線を退いた世代の知恵とが共に協力しあってこそ良い方向に前進できるのだと考える。

■ユスロン・イザ・マヘンドラ次期駐日インドネシア大使の経歴

生年月日：1958年2月6日(55歳)
 出身：プリトゥン(パンカ・プリトゥン州)
 宗教：イスラム教
 学歴：
 1986年 インドネシア大学社会政治学部国際関係学科卒業
 1992年 筑波大学大学院修士号(法律学)
 1999年 筑波大学大学院博士号(国際政治経済学)
 家族 夫人との間に2子
 職歴：
 1986年 インドネシア大学研究員
 ムハマディア大学講師
 1994年 コンパス紙東京特派員(2002年まで)
 日本大学講師
 ユスリル・マヘンドラ&パートナーズ法律事務所
 2004年 国会議員(DPR、月星党)
 第9委員会(人口・保険・労働・移住担当)、第1委員会(外交・防衛・情報)副委員長
 趣味：パイプ収集
 その他：日本滞在が長く親日的。日本語に堪能、実兄にユスリル・イザ・マヘンドラ元国家官房長官(ユドヨノ政権時)